

「思考の穴」：要約（1/3）

“THINKING 101” How to Reason Better, to Live Better, The Pre-Req to live.
原題:「101の思考」・人生に必須のもっといい理由付けからもっといい生き方へ

アン・ウーキョン 著 花塚恵 訳 ダイアモンド社 2023年9月初版、2023年第3刷
B・5:382ページ



Woo-kyoung Ahn
アン・ウーキョン

わかっていても避けられない
第1章 「流暢性」の魔力
第2章 「確証バイアス」で思い込む

- 第3章 「原因」はこれだ！
- 第4章 危険な「エピソード」
- 第5章 「損したくない！」間違える
- 第6章 脳が勝手に「解釈」する
- 第7章 「知識」は呪う
- 第8章 わかっているのに「我慢」できない

わかっていても避けられない？

私がイリノイ大学アーバナシャンペーン校の大学院で認知心理学の研究をしていたとき、ある集まりで私はしばらく頭を悩ませていた疑問を思い切って指導教授にぶつめた。「認知心理学で世界をよくすることができますか？」

ありとあらゆる「思考の不具合」を探求する

教授はシンプルに「イエス」と答えた。そのあと詳しい説明が続くのを待ったけど、彼はそれ以上何も言わなかった。それから30年にわたり、私はその疑問の答えを自ら模索すべく、現実世界の問題に適用できそうな解決策を探り続けている。

2003年にイェル大学の心理学教授になってからは、人を惑わせるさまざまなバイアスについて調べ、さらにはそうしたバイアスを正す方法を考案してきた。その方法は、日常生活で遭遇する状況に実際に適用できるものだ。

課題を先延ばしにした学生は、することは全く同じなのに、いま対処するより、後で対処する方がうまくできると思ってしまい、後から苦しむことになった。私の教え子を誤診した医師は自身が立てた仮説を裏付ける質問しかなかったから誤診した。

現実を一方からしか見ようとせず、自分に降りかかる災難をすべて自分のせいにすることで不幸になる人もいれば、自分に非があると考えもしない誰かのせいで不幸になる人もいる。相手に絶対わかる言葉で伝えたと考えていたら、実際には完全に誤解されて苦々しい思いをした夫婦もいる。

イェル大学の超人気講義「シンキングThinking」

「思考の不具合」によって問題が生じるのは、個々人の生活だけにとどまらない。そういう根本的なエラーやバイアスは、実にさまざまな社会経済的な問題を引き起こす。政治の分極化、気候変動への加担、人種差別、警官の発砲をはじめ、ステレオタイプや偏見が根っこにあるほぼすべての問題に関係している。

私は「シンキング(thinking)」という講義を開始し、心理学がそうした問題の認識や対処、さらには日常においてさまざまな決断を下すときの判断力の向上にどう役立つかを教えることにした。仕事を離れた場でも、私が講義でテーマにした内容を話題にすると、もっと詳しく知りたいと言われた。

戦略的に「論理的思考力」を向上させる

思考におけるエラーやバイアスについて説明するとはいえ、この本は人が抱える問題点を指摘するものではない。(思考する対象の是非を問うものではない。)

「思考の不具合」は私たちの脳が非常に込み入ったかたちで配線されているから起こるもので、納得できる理由がある場合がほとんどだ。論理的に考えているはずでも間違ってしまうのは、おもに、認知能力が高度な進化を遂げてきたことが原因だ。

しかも、どんなタイプのバイアスも取り除くのは恐ろしく難しい。不眠の状態が生じれば、何が問題化は明確にわかる。しかし、不眠の人に向かって「睡眠時間をもっとふやせ」と告げても、何の解決にもならない。バイアスを避けるには、「そのバイアスをかけるな」と注意する以上の処方箋が必要になる。さいわい、裏付けとなる研究の数が増えるにつれて、「論理的思考力」の向上を図るうえで、すぐに活用できる戦略もわかってきている。

T.K.の個人的意見・感想、参考

バイアス:bias / ななめ(一義)
偏見・思い込み(二義)

第1章 「流暢性」の魔力

人はすぐ「これは簡単」とってしまう

この講義は、自分のことを平均より上だと認識する現象の説明からはじまる。100万人の高校生に、「リーダーシップ能力」を自己評価させた実験では、70%が自分の能力を平均以上と評価し、「周囲とうまくやっていく能力」に至っては、60%が自分は上位10%に入ると評価した。大学教授に「指導力」を自己評価させた調査では、3分の2の教授が、自分は上位25%に入ると回答した。

こうした自分を評価するさまざまな例を示した後、次に「自分の運転技術は平均以上だと主張するアメリカ人は何パーセントだと思いますか？」と問いかける。すると、先に紹介した例より高い数字が学生たちから挙がる。80%、85%の声に笑いが起こるのはそんなに高いはずがないと思っているのだろう。だが、彼らの推測ではまだ低すぎる。正解は93%だ。

「BTS(韓国のグループ)のダンスを踊れる」と錯覚した訳
韓国のBTSが歌う「Boy With Luv」のミュージックビデオから切り取った6秒の動画を流す。私はあえて、振付が複雑すぎない部分を選んで切りとった。動画を流し終えたら、そのダンスを踊ることができた人には賞品を用意したと告げる。そして、同じ動画をもう10回流す。さらに、このダンスの指導用のスローバージョンの動画を流す。そしてダンスに挑戦する志願者を募る。舞台上上がった志願者たちは曲に合わせて踊ろうとするが、そのタイミングはバラバラ。何人かは3秒で踊るのをあきらめる。

何度も見ると、なぜか「できる」とってしまう・・・「流暢性効果」とは何か？

頭の中で容易に処理できるものは、人に過信をもたらす。そして生まれる過信のことを「流暢性効果」と呼ぶ。流暢性効果はそつと私たちに忍び寄り、さまざまな錯覚を生じさせる。講義中にBTSのダンスを学生に踊らせるという発想は、人が新しいスキルを習得するときに生まれる流暢性の錯覚について調べた研究から得たものだ。

同じように、マイケル・ジャクソンのムーンウォークをしているミュージックビデオ6秒間を1回だけ見せた学生と20回見せた学生の2つのグループを作り、自分がどれくらいマイケルのように滑らかに後ろ向きで歩けるかを全員に自己評価させた。すると、20回見た学生の方が1回しか見なかった学生よりも強い自信を示した。何度も見たことから、動きを細部まですべて覚え、頭の中で簡単に再生できるようになったと思っただからだ。そして、20回もムーンウォークを見た学生と1回しか見なかった学生とは、実際にムーンウォークをやってみてどちらもうまくいなくて差はなかった。

料理番組、フィギュアスケート、上手なトークを何回も見たり、聞いたりしていると、誰でもできると錯覚してしまう。上手な人たちを見ている時間は短くても、その背後には何倍もの時間をかけて練習し、改善を重ねているからできるのであって、それを知らない人は簡単にできると錯覚してしまう。短いスピーチやプレゼンは長いスピーチやプレゼンよりも難しいものだ。

追加情報を得ると「本当らしく」思ってしまう

流暢性が錯覚をもたらす対象は、ダンスや歌、スピーチといったスキルだけにとどまらない。知識にまつわる部分にも影響を及ぼす。人は新たな知見を得たときに、それが見出された経緯を知ると、その知見が事実だと信じる気持ちが強くなるのだ。

イボはウイルスの感染によって生じ、ウイルスは空気と日光を遮断すれば死滅させることが可能になる。イボをダクトテープで覆えば、まさにその状態になるのだ。このように、結果が生じるまでのプロセスが明らかになると、ダクトテープに治療力があるという話の信憑性が増す。

これらから、人は基本的なメカニズムを思い描くことができると、相関関係に因果関係を見出そうとする傾向が強くなると判明した。手持ちのデータが全く同じでも、結果が生まれるまでのプロセスを流暢に思い描くことができると、それを因果関係だと早合点する傾向が強くなる。それ自体は悪いことではないが、基本的なメカニズムに不備があれば、話は別だ。こうだと確信して頭に描いた流暢なプロセスが誤りならば、見出した因果関係も誤りである可能性が高い。

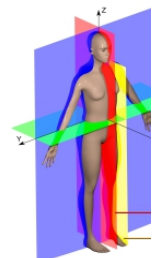
具体的な例がある。これは「超占星術」を自称するミッシェル・ゴークランという人物が1960年代に書いた本で、統計資料の提示から始まる。(まともな資料という前提で話を進める)たとえば、火星が出現し正中した直後に生まれた人は、医師や科学者、アスリートとして大成する確立が高いという。彼は精緻な資料を使って結論を導き出した。彼の結論に懐疑的な人はいた。彼自身、自分の発見に困惑し、釈明してみせる。科学的根拠の薄そうな、「赤ん坊は誕生する瞬間、惑星によって何らかの才能を授けられる」という仮説を退け、代わりにもう少し、通りのいい説明を提示する。それによると、人の性格、特性、知性はある程度生まれつきのものであり、それらは子宮にいるときにすでに授かっている。胎児は誕生する準備が整うと、化学信号を発して陣痛を促す。何らかの性格特性を備えた胎児は、地球外の事象によって生じた微量の重力に呼応して準備を整え、信号を発するというのだ。

「流暢性効果」
心理学の専門用語
理解しやすいことは
簡単なことに思ってしまう。
「言うは易し、行うは難し」

ダクトテープ(塩ビ絶縁テープ)



正中は南中のことか
南中:天体が真南にくること
正中:身体の中心線



このような込み入った説明をされると、懐疑的だった人ですら、「ありえない」から「ありえない」とは言い切れない」へと意見を翻すことがあってもおかしくない。一部の陰謀論がいつまでもはびこっているのも、こうした「知識がもたらす錯覚」のせいかもしれない。

「ジョン・F・ケネディを暗殺したオスワルトはCIAのエージェントだった」という陰謀論は突飛過ぎるように思えるが、「CIAは大統領の共産主義への対処を憂慮していた」との説明が加わると説得力が増す。

Deep State

Qアノンによる「トランプ元アメリカ大統領は、ディープ・ステート(闇の政府)に隠された、悪魔を崇拝する小児性愛者で人食いの集団による秘密結社とひそかに闘っている」という陰謀論は、政府の内部情報にアクセスできる「Q」が情報源ということになっている。もちろん中身はデタラメだが、Qの投稿に専門用語がふんだんに使われていたことで、知識がもたらす錯覚が生じ、その内容を事実として受け止める人が多く現れた。

「言いやすい名前」のものを高く評価してしまう

流暢性効果は、たちの悪い不合理な錯覚も招く。これらの錯覚は目の前の何かに、「流暢性」を知覚したときに生じるものだ。これからやろうとする作業に流暢性を感じると、それを実行した場合の難しさを過少評価する。また、異議を唱えていた何かの基本的な構造が明らかになるだけで、その何かは一切変わってなくても、受け入れ難かった部分が受け入れやすくなったように感じる。だが、実は判断する本質的には無関係な要素に流暢性を感じた場合でも、判断を歪められる恐れがある。

言語流暢性として
キャッチコピー、
標語、ことわざ

視覚流動性として
交通標識、絵文字、ヒトグラム

株式銘柄が市場でのパフォーマンスへの期待度合いにどう影響を及ぼすかを調べた研究がある。発音しやすい架空の株式銘柄(フリンクス、タンリー)と、あまり発音しにくい株式銘柄(ユリムニアス、クオウン)を用意した。実験の参加者にそれらの株式銘柄の名称だけを情報として与えたところ、発音しやすい(流暢性のある)株式銘柄は高く評価され、そうでない(流暢性がない)株式銘柄は低く評価された。

聴覚流暢性として
オノマトペ、和音、メロディ

研究者たちは実在する20の株式銘柄についてその株価の推移を追った。(サザンパシフィック・レール、グアンシェン・レールのような)すると、発音しやすい株式銘柄の方が1日でそうでない株式銘柄よりも113ドル多く利益をもたらした。だが、それはただ単に、流暢性のない名称の企業が、アメリカの株式市場で取引する人々になじみが薄かっただけの話だと思う人もいるだろう。

そこで、研究者たちはアルファベット3文字のティッカーコードに注目した。(カー・グローバルのKAR、ヒュレット・パッカートのHPQなど)驚いたことに、ニューヨーク証券取引所、アメリカ証券取引所のどちらを見ても、言葉として発音できるティッカーコードの企業の株価パフォーマンスはそうでない企業に比べてはるかに優れていた。ティッカーコードの流暢性の度合いなどは、会社としての優良性には全く関係がないはずなのに、言葉として発音できるコードの株式銘柄の企業のほうに価値を見出したのだ。

「無関係な知識」で自信を持ってしまう

株式市場に詳しくない人もいるだろうから、ネット検索で密かに生じる流暢性効果について見ていこう。今日では、なんでも「ググる」ことができる。しかし、専門的な情報にアクセスすると、過信を生むおそれがある。実際に持ち合わせている以上の知識が自分にあると思込み、ググっていない話題についても知っていると思ってしまうのだ。

ググる: googleで検索する

それを確かめた実験がある。実験に参加した全員に「閏年(うるうどし)があるのはなぜか?」「月にはなぜ満ち欠けするのか?」と問いかけた実験だ。まず、半数の参加者にインターネットで質問の答えを探すように指示し、残りの半数にはそれをさせなかった。そして、次に、どちらのグループにも検索を許さずに、「アメリカ南北戦争は何が原因・発端となったか?」「チースにはなぜ穴が開いているのか?」といった新しい質問をした。

「知ったかぶり、けがの元」
「かまとと」

前半の実験・質問と、後半の質問は全く関係がない。後半の質問にはどちらのグループも検索を許されていないので、答えは同じ程度の回答をしそうだが、実際は、前の実験で検索を許され、検索したグループのほうが回答に自信をもっていた。無関係な情報にアクセス(接した)したことで、自分の知識に対する自信が吊り上がってしまう。

いくら学んでも「罠(わな)」に陥る

私は流暢性効果について理解しているが、それでも、いまだにその罠に落ちてしまうことがある。ユーチューブで犬の毛の手入れを見て、自分でもできるとやってみて失敗したことがある。ガーデニングのカatalogを見て、自分でもできると思い、野菜の種子を大量に買い込んで始めたが、収穫できたのはピーマン4個とサダ3回分のケールだけだった。カatalogでは簡単そうに見えたのに。

私が本当に認知バイアスの専門家であるなら、どうしてバイアスの影響を避けられないのか? その答えは、認知バイアスのほとんどが脳の高度な適応のメカニズムの副産物として生まれたものだからだ。このメカニズムはヒトという種が何千年にもわたって生き残る中で、役に立つように進化したもので、簡単には制止できるものではない。流暢性効果が生じる原因は、「メタ認知」と呼ばれる能力で使用されるシンプルで単純な法則にある。「メタ認知」とは心理学の専門用語で「何かを認知しているかどうかを認知する能力」のこと。泳ぎ方を知っているか、固定金利型住宅ローンの意味を知っているかを自分が知っていること。

人間だけでなく他の植物、動物にも思い込みが習性として遺伝子に刷り込まれている。人はそれを利用して園芸、農業、狩猟、漁業をしている。

これは、認知を構成する要素の中で重要な能力となる。多認知とは取るべき行動を教えてくださいける能力なのだ。

人は「直感」でテキパキ判断している・・・「ヒューリスティック」とは何か？

多認知にとってとくに有益な判断材料となるのが、「親近性」「やりやすさ」「流暢性」の感覚だ。人は知っていることや、できることに慣れ親しんだ感覚をもっている。たとえば、ジョン・ロバートソンという男性を知っているかと尋ねられたとき、「知っている」「知らない」「知っているかもしれない」のどれかになるのは、その名前にとどのくらい親近性を覚えるか、どのくらい聞き覚えがあるかで決まる。

親近性による判断はヒューリスティック(経験則や直感による判断)に過ぎず、労力をかけずにそれなりの答えを見つかる急場しのぎの手段でしかない。たとえば、28%の法則は住宅購入できるかの判断に、税引きの月収の28%をローンに払えるかというもの。しかし、これで完璧な判断ができるわけではない。ヒューリスティックは役に立つ場合がほとんどだが、ときには私の犬のトリミング、園芸のように失敗することがある。

「錯覚」だとわかっているのに錯覚する

人がヒューリスティックを頼りにするようになったのはおそらく、多認知がもたらすメリットがときどき起こる錯覚のデメリットを上回るからだろう。私たちが目で見ている世界は眼球の内側で光に敏感に反応する「網膜」と呼ばれる平らな層状の膜に投影される。網膜は平面なので、それを通じて脳が受け取る映像は2Dとなる。しかし、実際の世界は3Dだ。世界を3Dで知覚するために、脳内の視覚系はさまざまな手がかりを活用する。透視図法はその表現技法の一つ。

ポンゾ錯視は目の錯覚であるとわかっているのに、Aの方が長く見えてしまう。これと同じで流暢性効果のような認知に生じる錯覚もまた、それが錯覚であると理解したからといって、錯覚から抜け出せるとは限らない。さらにいえば、「私たちは過信を防ぐために、流暢性や親近性の感覚を常に割り引いて考えるべきだ。」と思うなら、それは「ポンゾ錯視を防ぐため、透視図を使わずに世界を平面として知覚しよう」くらいにバカげた提案だ。

錯覚を引き起こすものはどれも、人が無限の可能性を秘めた不確かな世界を突き進んでいけるようになるため、認知システムが適応してきたから生まれた。たとえ、混乱を招くことがあるとしても、流暢性の感覚に頼って「自分が知っているかどうか」を判断できるのであれば、それに越したことはない。

錯視が人に害を及ぼすことはほとんどない。しかし、過信して適切な準備を怠れば、転職の面接で失態をさらすかもしれない。株の銘柄から感じ取った流暢性を過剰に評価すれば、老後の資金を失うかもしれない。QAノンから聞いた話を信用すれば連邦議会の襲撃してしまうかもしれない。流暢性効果の存在を知り、それが害を及ぼす恐れがあると学習しても、それだけではまだ足りない。

「ただやってみる」のが最高の対抗策

流暢性効果は認知システムにおける適応のメカニズムから生じるとはいえ、克服する術がないわけではない。単純に、実際に試したうえで、流暢にいかないとの実感を得るのも一つの手だ。試してみるという当たり前のことが、実際に試す人は意外に少ない。対策として、自分の知識を書き出すと過信が軽減される可能性がある、と実証した研究がある。

この研究では実験の参加者に、トイレ、ミシン、ヘリコプターの動く仕組みに関する知識を7点満点で自己評価させた。実験の参加者がつけた自己評価の平均は7点の真ん中の4点前後になった。4点では自信過剰とは見えないかも知れないが、実際は過信しており、その過信は流暢性による錯覚によって引き起こされたものだ。参加者にヘリコプターが実際に動く仕組み(方向転換の方法など)を書き出すか、口頭で説明するように指示を受けると、ほとんどの人が非常にあやふやになった。彼らは自分が思っていたよりはるかに何も知らないと感じかされたのだ。

「知識の穴」を知るには？

仮に、仕事の面接で、面接官から「あなたの強みは何ですか？」と尋ねられたら、あなたは用意した「整理とまとめる力」と答えをするだろう。さらに突っ込まれた質問をされると、困窮する。想定問答を作り、実際に練習することで、自分の回答を客観視することができる。また、回答を書き出して、それが他人の答えだと思って、自分が面接官なら、この回答をした人を採用するかどうかを検討することができる。

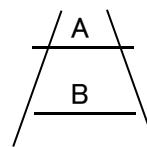
過信が減ると「プレゼンテーションのスキルや面接で受け答えるスキルが向上し、パーティーで恥をかかないようになる」といった個人的なメリットだけでなく、社会全体のためになる。ある研究では、過信がなくなると、政治的な過激思想の減少を招く可能性が示唆された。ほとんどの人は、中絶、福祉、気候変動といったさまざまな社会問題に対して、確固たる意見を持っている。しかし、説明を強いられない限り、そのような社会問題については自分は何も知らないと感じけない。少し説明を求めただけで、人は謙虚になるのだ。

防災訓練の必要性
防災の知識がいくらあっても、実際に行動できるわけではない。

消防・警察・自衛隊どんな職業も
実務・訓練の蓄積が必須

そもそも学習とはヒューリスティックを
構築することでないか。
創造とはヒューリスティックを破壊
することでないか。

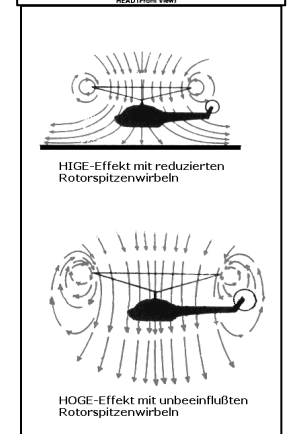
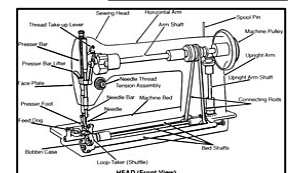
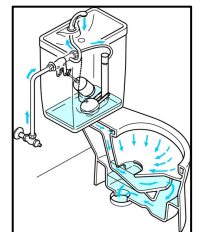
ポンゾ錯視



左の図は2Dであるが、
レールのように3Dとして
見ると、遠近感が出る。
線Aも線Bも2Dでは
同じ長さだけど、3Dとして
見ると、線Aは長く見える。

絵画の遠近法は錯視があることが
前提になる。錯視がなければ遠近法
の絵画は成立しない。

手品、マジックは流暢に見せることで
錯視、錯覚を作っている。人はそれを
錯覚として楽しんでいる。
詐欺、オカルトは流暢性効果の錯覚を
悪用、誤用しているとも言える。



いつもあなたの「計画」は甘すぎる……計画錯誤とはなにか？

残念ながら、実際に試したり、知識を言葉で表したりするだけでは過信が減らないケースも多々ある。考慮に入れなければならないのは「計画錯誤」だ。何かを完了させるために必要となる時間と労力は、少なく見積もられることが多い。締め切りに遅れる、予算が超過する、やりとげる前にエネルギーが尽きる、といったことが頻繁に起こるのはそのためだ。

オーストラリア、シドニーオペラハウスの建設は当初700万ドルの予算が、最終的には規模が小さくなったうえ、1億200万ドルになり、工期は当初の見積より10年伸びた。

アメリカ・デンバー国際空港の建設では、当初の見積予算より20億ドル費用が増え、工期は16ヶ月延びた。

計画錯誤が生じるのは建設プロジェクトに限った話ではない。ITを専門とする人達にはそんな計画錯誤はないように思うが、IT関連の調査とアドバイスを行っているスタンディッシュ・グループのレポートによれば、2011年～2015年の期間に、アメリカで実施され、成功したITプロジェクトの割合は29～31%程度だった。(成功の定義は当初の予算で予定期間内で必要な機能をすべて完成させること。)プロジェクトの半数は、締め切りに遅れるか、予算超過、機能未達に該当し、プロジェクトの17～22%は単純に頓挫して改善の兆しもなかった。

タスク(課題)を「分解」すれば、現実に気づける

計画錯誤が生じる原因はいくつかある。そのうちの 하나가「希望的観測」だ。人は自分が携わるプロジェクトに関して、遅れずに、早く完了し、あまり予算を掛けずにと願う。こうした願望が、計画の立案や予算の編成に反映されてしまうのだ。それから、計画錯誤は過信の一種といっても過言でなく、流暢性による錯誤から生じるという点も覚えておかなければならない。

こんな研究がある。「クリスマスプレゼントの買い物が完了するまでにどれくらいの時間がかかるか」見積もってもらった。平均して12月20日までに完了するとの回答になった。しかし、これは計画錯誤による幻想にすぎなかった。実際には平均22日か23日までかかった。計画錯誤に陥らないようにするには、具体的に綿密な計画を立てればいいのかと、別のグループに詳しい計画を書き出してもらってから買い物をしてもらった。しかし、彼らも平均して22日か23日までかかっている。それは計画を立てたことによって、難なくスムーズに買い物ができると錯覚が生じたからだ。映画のように格好よくはいかなかった。

だからといって、「順を追って計画を立てるな」という訳ではない。一つのタスク(課題)を取り組みやすい小さなタスク(作業)に分解すると、計画錯誤が軽減されるという。それでも、流暢にできるという錯覚が生まれる可能性はある。この錯覚が生じれば、自分の思い通りになるという感覚が強まり、計画錯誤を助長するおそれがあることに注意がいる。

見積より「50%」多く時間を確保する。

計画錯誤を克服するには、実際に試す前に、計画を立てることが求められる。クリスマスプレゼントの買い物も、シドニーオペラハウスの建設もリハーサルができない。しかし、できることはある。頭でシミュレーションするとき、計画遂行の障害となり得るものを思い浮かべて流暢性に淀みを生じさせるのだ。シミュレーションで思い浮かべる障害には二通りある。一つは、計画のタスク(作業)に直接関係ある障害は想定しやすい。クリスマスプレゼントの買い物の場合では、交通渋滞や、買おうとしている商品の在庫切れなど。もう一つの障害は想定できない事故や病気、怪我がある。そのために、私がしていることは常に、最初の見積よりも50%多い時間を見積もっていることだ。たとえば、2日で原稿を確認できると思っていても、担当者には3日以内にと返事する。この方法でおおむね問題が起きないようにして乗り越えている。

本能に「楽観主義」が組み込まれている

楽観主義はいわば流暢性効果にとってのエンジンオイルのようなものだ。何もかもうまく進みそうだという気持ちを一層強くさせる。人は楽観的な気持ちになると、失敗の可能性や障害となるものに目をつぶってしまう。楽観的になると、ストレスが軽減されて幸福感が高まりやすい。心身ともに健康状態も改善する。そのおかげで、楽観主義は長生きなのだ。楽観的な姿勢は健康にいいだけでなく、生き延びるうえで不可欠な要素でもある。楽観主義は競合状態にあるときに、とりわけ有利に働くという意見もある。

例えば、同じ建設プロジェクトの入札でいつも負ける側にいる敗者も、相手が興味を示さない物件なら、入札を取れるように考えられるようになる。私達には脳内に楽観的な姿勢がある程度組み込まれている可能性がある。これについて鳥やラットなどの実験で実証されている。ムクドリに2秒間の音が聞こえたときに赤のボタンを押すと餌がもらえ、10秒間の音が聞こえたときに緑のボタンを押せば餌が貰えるように学習させた。2秒間の音が聞こえた場合のほうに餌をを良くした。中途半端な6秒間の音を聞かせたと、ムクドリはどのように反応したかをみた。ムクドリは2秒間の音がした場合の赤のボタンを押した。ムクドリは楽観的だったと言える。食べ物に関して、生物は「もしかして・・・」と楽観的になると思われる。

シドニーオペラハウス



1959年着工、1973年竣工

デンバー国際空港



2022年12月紹介
「ブラックスワン」



発明、発見も実験のムクドリのように、楽観的に「もしかして・・・」という発想が必要なのかも。



家を「リフォーム」するときにはこうしなさい

私が買った家は築100年を超えたものだ。古い家としてのいいことは何もない。立地がいいので買ったままだ。家の半分にはリフォームが必要と思った。私も夫も家の維持管理についてはよくわからない。とはいえ、この章で語ってきたことを踏まえると、家のリフォームに対して自身がいないことは、リフォームするにあたって大きなメリットになる。業者が出す見積りよりも50%多くの時間と予算を確保しておくことを推奨するリフォームの専門家が多いので、その通りにすると決めた。

私は前回のリフォームのときに、作業員をあまり長く一人きりにしてはいけないと学んだ。一人になった作業員に、独創的な修正を勝手に加えられたからだ。今度のリフォームでは作業員を一人にする時間はほぼ作らないつもりだ。

リフォームは日本語 renewal, renovation
アメリカの業者と日本の業者とは状況は違う。

日本でも、施主とのトラブルの原因はこのような意見の違い。

第2章 「確証」バイアスで思い込む 賢い人が自信満々にずれていく

「自分が正しい」と思える証拠ばかり集めてしまう

3つの数字に隠されている法則を見つけ出して答えてもらう3つの数字の実験。

出題者:「2, 4, 6にどんな法則がありますか?」

回答者:「2つずつ増えていく偶数です。」

出題者:「違います。」

回答者:「2つずつ増えていく数字です。」

出題者:「違います。」

回答者:「だったら、-9, -7, -5はどうだ。」

出題者:「当てはまります。」

回答者:「では1004, 1006, 1008はどうだ。」

出題者:「あてはまります。」

これはピーター・C・ウェイソンの有名な「2-4-6課題」。

回答者はほとんど自説が正しいと証明する証拠ばかり集めているのだ。自説を裏付ける証拠となるデータは確かに必要だが、それだけでは十分ではない。その仮設の反証も試みる必要がある。

「最初の考え」に固執しているから間違える

「4, 6, 8」「3, 5, 7」「13, 15, 17」「-9, -7, -5」「1004, 1006, 1008」
いずれの3つの数字にあてはまる法則は、はっきりいって無限にある。すべての仮設を検証することはできないが、いずれの数字の並びにもあてはまる法則の候補が沢山あるときに、真っ先に頭に浮かんだ仮設に固執しては、この問題の正解はいつまでたっても見つからない。

あなたはいくつ仮設を立てられますか?

人は論理的でも合理的でもない・・・「確証バイアスとはなにか?

ピーター・C・ウェイソンは英国の認知心理学者で、ユニバーシティ・カレッジ・ロンドンで研究していた。この「2-4-6課題」を1960年に考案し、「確証バイアス」と名付けてバイアスの存在を実験的に証明した。「確証バイアス」とは人が「自分が信じているものの裏付けを得ようとする」傾向のことを指す。かれはこの実験の構造に問題があるかも知れないと、修正を探った。彼はハーバート大学で同じ実験をしたとき、回答は1回しかできないと回答者に伝えれば、早合点は防げると期待した。しかし、結果は75%の回答者が間違った。

戦争、革命、冤罪、独裁、失策、誤診、事故、けが、誹謗中傷、経済恐慌・・・
確証バイアスによるものか。
行動経済学はここからはじまった。

「エビアン」を飲んだら若返る?

もっともらしい証拠を提示して、意図的に世間を誤解に導くケースがある。2004年に英国で展開されたエビアンの広告がいい例だ。その広告は自転車で局部を隠した美人女性の写真で、その写真の下には「見せびらかしたくなる肌を手に入れよう。エビアンのピュアナチュラルウォーターを毎日1リットル飲んでいる人の79%が肌が滑らかでみずみずしくなり、見た目が若返ったと実感しています。」と書かれていた。「2-4-6の課題」を思い出して欲しい。どんな水でも毎日1リットル飲めば、肌は輝きを増し、若々しくなったと実感するかもしれない。他の銘柄でも、水道水でも結果は変わらないかもしれない。

最近では広告倫理委員会からの勧告でこのようなコピーは少なくなったが、一方では表現の自由としていまだに見られるが、その場合、個人の意見としてことわっている。

ドアが閉じたのは「閉ボタン」を押したおかげ?

もう一つ例をだす。エレベーターの扉を閉じるボタンを押すときだ。イラチな人は急いでいるとき、エレベーターの扉の「閉ボタン」をたたく。だが、「閉ボタン」を押したから扉が閉じたとどうすれば確かめられるか?エレベーターの扉開閉にはタイマーがついている、「障害を持つアメリカ人法」の制定以降、障害のある人でもエレベーターの乗り降りができるように時間を設定しなければならない。「閉ボタン」を押したらすぐに扉が閉じると考えるのは「確証バイアス」。

<https://www.ada.gov>

The Americans with Disabilities Act (ADA)

広い範囲で規制されている
日本のバリアフリー法のモデル

高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法

「モンスターズプレー」でお化けを退治する

息子が5歳のとき、夫がイェール大学の寄宿制カレッジの責任者(学生寮管理人)になった。建物は広く、古めかしかった。息子は「お化けが出る」といって、ぐずった。そこでペットボトルにスプレーノズルをつけて、「お化け退治のスプレー」と息子に説明して、寮の全室を二人でお化けを退治しようと「お化け退治スプレー」でスプレーしてまわった。それから息子はぐずらなくなった。

おまじないの習慣は「確認バイアス」の有効活用か?
鯛の頭も信心から!

なぜ賢明な人たちが「瀉血(しゃけつ)」していたか

何年、何十年と、いや何世紀にもわたって、特定の集団に属する人々全体が確証バイアスにとらわれていることがある。その例は瀉血(しゃけつ)だ。古代から19世紀にかけて、西洋では病人から「悪い血」を抜けば病気は治ると信じられていた。ジョージ・ワシントンも喉の感染症の治療として1.7リットルの血を抜かれ、そのために亡くなったと言われる。賢明な私たちの先祖が200年以上にわたり、生存に不可欠なものを体内から抜くことが有益だと信じていたのはなぜか？

現代に暮らす私たちが当時の状況に置かれても、結果はあまり変わらないかも知れない。病気になっても瀉血しなかった人が100人いて、そのうち75人が体調を回復していたらどうだろう。3/4の人が瀉血しなくても体調が回復するということだ。人間の身体には治療力が備わっているのだから、瀉血のおかげで治ったとの誤解が生じる可能性があるのは仕方のないことだ。しかしながら、私たちの先祖は、瀉血しなかった人はどうなったかという確認を怠った。自分が信じるものの裏付けとなる証拠にしか目を向けなかったのだ。

確証バイアスに気づける「クイズ」

「自己肯定感とリーダーとしての資質の関係を調べている研究者が、リーダーとしての資質が高い人を1000人集めた。そのうちの990人は自己肯定感が高く、10人は低い。ほかに情報がないものとした場合、これらのデータから導き出させる最良の結論は次のどれか。」

- ①自己肯定感とリーダーとしての資質は、強固な正比例の関係にある。
- ②自己肯定感とリーダーとしての資質は、強固な反比例の関係にある。
- ③自己肯定感とリーダーとしての資質には、関連性は一切ない。
- ④これらのデータから導き出させる結論は何もない。

私のクラスの学生は大変優秀な学生であるが、学生の1/3は①をえらんだ。それは不正解である。確証バイアスを学習した直後であっても、確証バイアスの影響から逃れられないのだ。2-4-6課題のときと同じで、自己肯定感の高さがリーダーとしての資質に関係するという最初の仮説には説得力がある。それに加えて、提示されているデータの99%が、その仮説を指示しているようにも思える。

なぜこの仮説が誤りとなるのか。問題に登場する研究者は、リーダーとしての資質が乏しい人に関するデータを何一つ提示していない。クイズの答えは④。提示されるデータからはいかなる結論も出せない。

「思い込み」で人生が歪んでしまう

現実では、自分の出した結論の正否をいちいち教えてくれる科学者はいない。確証バイアスにとらわれている人は、自分が出した結論がどれほど間違っているかわからずじまいかも知れない。確証バイアスから誤診をした医師は、誤診をしたことには気づかない。確証バイアスの罠に陥ったところで、自分が間違っていたと気づくことさえないのであれば、確証バイアスが本人に直接害を与えることなどあるのだろうか？もちろんある。個人に限らず、社会レベルでも害の恐れがある。

人は「自分のこと」がとても知りたい

誰もが自分に強い関心を持っているから、インターネットや雑誌には「〇〇からわかる本当の自分」といった見出しで始まる「診断テスト」があふれている。〇〇とは筆跡、笑い方、好きな音楽、好きな食べ物、好きな小説など挙げればきりがない。こうした診断を裏付けとして思い込み、自分の性格を確信する。その診断結果の思い込みからさまざまな行動に出る。これを「予言の自己成就」と呼ぶ。

「遺伝の影響」を思い込ませる実験

昨今では23andMeなどの会社を利用すれば、個人で簡単に自分の遺伝子検査の結果を入手できる。100ドルで自分の先祖に関するレポートを入手でき、さらに100ドル払えば、自分の体質の傾向についても知ることができる。

この検査結果は誤って解釈されやすい。中には「遺伝子で人生が決まる」と信じている人もいるようだが、そんなことはありえない。なぜなら、遺伝子は常に環境の影響を受けるからだ。たとえ、遺伝子が運命を握っているとまでは信じていなくても、遺伝子検査結果を理解しようとしたとき、確証バイアスによって自分の過去を書き換えてしまう可能性はある。

唾液からうつ病に対する遺伝子的感受性を調べると被験者に告げたある実験を行った。実験は指定のうがい液でうがいをして、そのあと、試験紙を舌にあてて、試験紙の色変化をWebサイトで調べて報告するというものだった。(検査は作為的に結果がでるようにしたもの。)

簡単に「疑似うつ状態」になってしまう

被験者は無作為に2つのグループに分けられた。1つはWebサイトで色変化を確認した内容が「うつ病に対して遺伝子的感受性がない(遺伝はない)」ことを示すもの。もう1つのグループは「うつ病に対して遺伝子的感受性がある(遺伝的)」ことを示すもの。結果を知った被験者はそのあと、バック抑うつ質問票に回答した。この質問票はうつ病の程度の評価に有効なもの。過去2週間に体験したさまざまなうつ症状の度合いを4段階で尋ねるものだ。「悲しくない」「悲しい」「悲しさから逃げられない」「耐え難いほど悲しく不幸」の4段階。

被験者のグループ分けは無作為であり、過去2週間のうつ症状がどちらかに偏ることはない。にせの唾液検査で遺伝なしと告げられたグループの回答結果の平均は基本的にうつではないと分類されるのに対し、にせの唾液検査で遺伝的と告げられたグループの回答の平均は強いうつ症状を示した。にせの実験結果による確証バイアスはこうした疑似うつ状態を容易に引き起しえる。このような実験は倫理的な問題を含んでいるので、実験は大学の倫理委員会と入念に協議したうえで考案され、実施された。

現在、薬効はプラシーボ(偽薬)を使って薬が確証バイアスではなくて、本当に効いているのかを確認する。

政治家もジャーナリストも経営者も、学者もときどき同じような過ちを犯している。

冤罪を作った検事、誤診をした医師、詐欺にあった人、事故を起した人...

「孤独な群衆」でデビッド・リースマンは「情報化社会」では人は他人からの評価を気にして他人志向になるという。

23andMe

<https://ja.wikipedia.org/wiki/23andMe>

作為的な暗示、洗脳はこのようにして作られるという実験例。

信じたとたん、信じたように行動し始める

この実験で明らかにされたような確証バイアスには深刻な問題が見て取れる。それは「悪循環」だ。暫定的な仮説を裏付ける証拠ばかり集めていると、それが正しいと確信する気持ちが極端に強くなっていき、裏付けとなる証拠をさらに求めるようになる。実験結果はつねに確率的であり、不確実性を含んでいる。実験やテストには完璧はありえない。世界とはそういうものだからだ。

アンジェリーナ・ジョリアーノが両乳房切除を決断のきっかけはBRCA1遺伝子は、遺伝的変異に関する有益な情報を与えてくれる。この遺伝子は60~90%の確率で乳がんを発症すると言われている。現実の結果は相互に作用する複数の遺伝子だけでなく、無関係な多種多様な要素が関係する。

自分自身だけでなく、雇用やカウンセリングの一助として活用する性格診断テストも同じで、それによって得られる情報は文脈とは切り離されたものだ。環境や状況によって文脈は変わる。

確証バイアスにとらわれると、簡単に自分を実際以上にすごいと思ったり、ダメだと思ったりする。自分はうつだと信じ始めたたとたん、うつ病患者のようにふるまいかねない。だから、私は確証バイアスは最悪の認知バイアスだと思っている。

「いびつな現実」が見えなくなる

これは私の家族の話です。夫が全米アカデミーからトロンブ賞を受賞したので、7歳の娘を連れてワシントンに行ったときのことです。受賞者全員が壇上に座っているのを、客席側に私と一緒に座っていた娘が突然「ママ、あそこはどうして女の人より男の人の方が多いの？」と大きな声で訊いてきました。そのとき、私は驚いたと同時に、娘の観察眼を心から誇らしく思った。

私自身、科学者として、この世界で女性より男性をよくめにするにすっかり慣れてしまい、それが特殊なことだと思わなくなっていた。そうした先入観のない子供から見ればそのアンバランスは明らかだった。真実は「2-4-6課題」と同じだ。男性と科学との関係に対し、社会全体が確証バイアスにとらわれてきたのだ。

不合理は「実害」を生む

この種の確証バイアスは、どのようにして社会に害をなすのか？「人間はみな平等に扱われるべき」という道徳の原理の根幹が侵害される。Netで「新型コロナウイルスのワクチンを開発した科学者」と入力した。私自身が確証バイアスにとらわれるのを避けるために「女性」という言葉は入力しなかった。ヒットしたのは、「オスレム・テュルジ博士」、「カリンカリコ博士」、そして「キャスリン・ジャンセン博士」、「アンソニー・ファウチ博士」、「バーニー・グラハム博士」、「キスマキア・コルベット博士」、これらの名前は検索結果の1ページに表示された6人の内、男性は2人だけだった。彼女たちも「女性に科学研究はできない」と思い込んでいたとしたら、いまはどんな世の中になっていただろうか。

シティグループは2020年のレポートで、人種に基づく差別によって機会の平等が損なわれることでアメリカに生じている損害を数値化した。それによると、過去20年間にわたって、アメリカの白人と黒人の両方の教育、住居、賃金、仕事に平等に投資されていたら、アメリカはさらに16兆ドル豊かになっていたはずだという。2019年のアメリカGDPは21兆4300億ドルだった。確証バイアスがなければ、気候変動、医療制度、世界平和に向けて、16兆ドルを使っていたかも知れない。

完璧をめざす人より「妥協する人」のほうがはるかに幸福である

確証バイアスがそんなにも悪いものなら、なぜ存在し続けているのだろうか？皮肉に聞こえるかもしれないが、実は確証バイアスによる適応力のおかげで、人間は生き延びてこられた。このバイアスによって、人は「認知能力」の儉約が可能になるのだ。急を要するのは、論理的に考えるときではない。生存が脅かされるときだ。

大昔、先祖がXという森でおいしいブルーベリーの実を沢山見つけたとしよう。先祖はXという森のブルーベリーに満足していたら、さらに他の森にもブルーベリーがあるかも知れないと思い、探しに行くだろうか。Xという森に満足している限り、他の森のことはどうでもよかった。ハーバート・サイモンは1978年に、この論理でノーベル経済学賞を受賞した。

彼の理論を理解するには、世界には無限の可能性があるという事実を意識しなければならない。チェスの試合ではプレイヤーが取れる手の数は、ルールという制約があるにもかかわらず、10の123乗あると言われる。打つ手の意思決定する際は、ある程度満足したところで、それ以上の探索をやめる必要がある。サイモンはその行為を「サティスファイ(満足する)」と「サファイ(十分)」の組み合わせから「サティスファイ」と呼んだ。

その後、さまざまな研究者によって研究がなされて、人生を通じて行わなければならない探求をどれだけ最大限にし、どれだけ「サティスファイ(満足してやめる)」は個々人によっておおきなバラツキがあると判明した。最大限に探求したい「マキマイザー(完璧主義者?)」はつねによりよい仕事に目を光らせている。現状の仕事に満足していても、違う人生を生きることを夢見る。興味深いことに、「サティスファイサー(満足してやめる人)」は「マキマイザー(完璧主義者?)」より幸福度が高い。

こうすれば「思考の罫」を破れる

確証バイアスが私たちに適応した起源を知ると、排除することの難しさをも痛感する。とはいえ、私たちにこんなにも染みついていて確証バイアスを克服したいのであれば、むしろ、確証バイアスを利用すればいい。

「99.9%は仮説」
2020年11月号でご紹介



トロンブ賞
Troland Research Awards

検索ワード
Scientists Who developed vaccine for COVID-19?

シティグループ(米国・銀行)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/シティグループ>

satisfy + suffice
= satisfice
(造語)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/マシマロ実験>
現在志向バイアス
(現在優先志向)

諺には矛盾するようなものがあります。
「虎穴に入らずんば虎子を得ず」
「君子危うきに近寄らず」
「嘘から出たまこと」「嘘も方便」
「嘘は泥棒の始まり」

ではどうするかといえば、1つでなく2つの相容れぬ仮説を立てて、両方の実証を試みるのだ。「2-4-6課題」を発展させた形で実験した。被験者に3つ並ぶ数字に2種類の法則としてDAXとMEXがあることを伝え、その法則を探し出すために、被験者に3つの数字を出してもらい、その都度出題者は「DAX」か「MEX」かを返事する。

被験者の問い:「2-4-6」は 出題者回答:「DAX」です
(被験者はDAXは偶数でないかと仮説をたてて、奇数を出して見る)
被験者の問い:「1-3-5」は 出題者回答:「DAX」です
(被験者はDAXを偶数、奇数に関係なく増える数の仮説を考えて別の数を出して見る)
被験者の問い:「15-12-8」は 出題者回答:「MEX」です
(被験者は数の増減に関係があるのではと仮説をたてて、別の数を出して見る)
被験者の問い:「100-18-9」は 出題者回答:「MEX」です

このように被験者が仮説をたて、仮説の反対を検討して、仮説が正しいかを推測していく。

「正反対」のことを自問する

もう一つの例を挙げる。先に話した私の夫の授賞式に参加したとき、50人の科学者全員が男性だと気づいたとき、「優秀な科学者はオスの遺伝子をもつから」、という仮説をたてて見る。「女性はダメな科学者になる」という仮説もたててみる。それから、「DAX」「MEX」の検証をしたようにダメな科学者を生む要素についても考えなければならぬ。(新型コロナウイルスの開発に貢献したのは女性科学者が多かったことは先に紹介した。)

もう一つの例。自分の社交生活にどの程度満足しているかを考えたとき、「自分は満足しているか、不満か」という自問が考えられる。このとき「不満は何か」を自問すると、不満なことが浮かんでくる。反対に「満足は何か」と自問すれば、満足していることが浮かんでくる。実験では「不満は何か」を訊いた被験者グループの方が、「満足は何か」を訊いた被験者グループよりはるかに強い不満を抱えている自己評価になった。

それでもバイアスには勝てない?

{DAXとMEXの両方の法則を検討する}「質問の切り口を反転させて問う」という対抗策は実に明解で、実行すれば確証バイアスの影響は間違いなく緩和されるだろう。だが残念ながら、別の可能性を試すことが常に適切な選択肢とは限らない。

「ためになるかもしれない」からやめられない

近年、多くの人が検証をためらった例がある。1993年、科学雑誌「Nature」に掲載されて有名な研究「モーツァルト効果」だ。この研究はモーツァルトの「2台のピアノのためのソナタ」を聴いた学生は、聴かなかった学生に比べ空間認識テストで高い点数を獲得したと報告した。この結果を知ったメディアは話を飛躍させ、「赤ん坊にモーツァルトを聴かせるとIQが高くなる」ことの科学的エビデンス(証拠)だと解釈した。すると、ある知事は州内の産科病棟にモーツァルトのCDを無償で配った。それから業者は「ベビー・モーツァルト」というビデオを作り、シリーズ化して「ベビー・バッハ」、ベビー・ゴッホ」を売り出した。2003年前後、アメリカ人世帯の1/3がこのシリーズのビデオを最低は1本所有していたという。

しかし、元の論文には、その効果は長続きせず、IQ全体ではなく空間認識能力に限定的に働くだけ、と書かれていた。これらのビデオを見た幼児と見なかった幼児とは何も違いが見られなかった。

あえて「偶然」に身を委ねる

リスクを取りたくない気持ちに加えて、習慣になっているという点も、確証バイアスに対抗しづらい原因となっている。生活習慣になっている歯の磨き方、爪を噛むくせなどなど、それらは、自説の裏付けを取ろうとする行為と同じで、自動的、かつ無意識に行ってしまう。

自説の裏付けを取ろうとする習慣を壊すには、何からはじめたらいいのだろう。まずは、確証バイアスが招く悲惨な事態について知ることだ。「しないこと」によるリスクが小さいものから反証を得る練習を始めることも習慣を壊す小さな一歩になる。日常生活にいつもと違うことをとり入れるのだ。すると、意外とこだわるのがなかったとわかるかも知れない。

ゲーグルで働いたマックス・ホーキンスは「予測できない生活」とはどんなものかを考えた。彼は自分が暮らす地域から無作為に目的地を選んで、タクシーで行くというアプリを開発した。存在すら知らなかった生花店、青果店、バーを発見するようになると、自分はかなり限定的な生活をしてきたことに気づかされる。誰もがそのようなアプリを購入するとは言えない。

そこで、もっと小さい規模で、いつもの行動とは違ったことをする練習方法がある。レストランで食事するとき、メニューから無作為に1つを注文するとか、友人と買い物に行ったら、友人に選んで貰った服を買うとかする。すると、生活に小さな変化が生まれる。そして考え方にも変化がでてくれればいい。

「思考の穴」の著者は人が錯覚して間違いをしたり、事故を起したり、人間関係を悪くしたりするのは、そうなるまでの思考の仕方、過程に問題があるという。思考の方法で一番大きい割合は言葉によるものとしているが、視覚的な情報による外部の認識も大きい。平面、立体ともに造形的な思考の要素、材料は視覚的なものになる。

言葉の情報でズレや誤解が起きるのは、言葉の意味そのものや、その意味範囲の違いがあると思われます。それらの違いが生じるのは個人、個人の言葉による経験が異なることにもあると思います。言葉による微妙な感覚の違いは方言によく現れます。言語感覚はどんな人と付き合っていたか、どんな本を呼んできたか、どんなTVを見てきたかなどなどによると思います

著者が冒頭で「確証バイアスの研究」が社会を変えるかという疑問からの出発は次第に具体的に記述されて行きますが、そこには西欧的な文化の背景が色濃く感じられます。現在の欧米文化の根底にあるのは一神教だと思います。極端な言い方をすれば「All or Nothing」の思考だと思います。一方、非西欧文化では多神教的な思考が社会の安定を支えているように思います。極端な言い方をすれば「いろんな解決策、多様な選択肢」の思考だと思います。

現在同時進行中のロシア対ウクライナの戦争、イスラエル対パレスチナ紛争は集団による確証バイアスの悲惨な進行だとも読み取れます。また、米中対立も一神教的な確証バイアスのようにも見えます。中国には多神教的な価値観を持っていた文化圏だったと思いますが、社会主義共産主義の一神教的な思考に偏っているように思います。とはいえ、現場にいない部外者、第三者の者がコメントすることは無責任なこと、尊大なことのようにも思います。しかし、本当に彼らが確証バイアスに陥っていないとすれば、何が彼らをそうさせているか？ 偏狭な自己中心の現実主義か、でもそれはやはり確証バイアスとしか言いようがないと思います。

このような見方で、日本を見ると、いまだに多神教的な思考が生きていると思います。言語、文字の多層構造、音楽、絵画、彫刻、演劇、衣食住などの多層構造は健在です。最近では、グローバル化、ITの進行で一神教的な方向に向いているようにも感じます。しかし、多神教的な考え方の中には「触らぬ神に祟りなし」「歓迎する神」「歓迎しない神」もいます。このような考え方が国際社会での活動に障害になっているのかも知れません。

(T.K.)